

往時今在眼

久留米市 茨木 和典

1. 出水特攻基地の空襲

私の実家は、終戦時の出水海軍航空隊に隣接する鹿児島県高尾野町上水流地区にあった。昭和20年3月18日、私は陸軍幼年学校を卒業後、埼玉県朝霞の陸軍予科士官学校への入校準備のために家にいた。朝早く旧制中学の後輩や小学生の弟とともに童心に帰って、青天井の下で玩具車を作って遊んでいた。音もなく、東の森陰から超低空の飛行機が突如大きく迫ってきた。カタカタッ！何だろう？。あっけにとられた次の一瞬、「空襲だっ、機銃掃射だっ！」。どう走ったか覚えていないが、約100m離れた防空壕に夢中でとびこんだ。最後尾の弟は、グラマン戦闘機の後部座席の射撃手が私達をねらい射つのははっきり見たという。

これが出水特攻基地の初空襲であった。この日から当基地から特攻機が沖縄の米軍艦船めがけて飛び立った。その後の約1ヶ月間に計8回の出撃が行われ、南海の空と海に65名の若人が散華した。今、旧基地の一隅に阿川弘之の名著「雲の墓標」の「雲こそわが墓標 落暉（らつき）よ碑銘をかざれ」の碑銘をもつ特攻碑に、その方々の氏名が刻まれて残る。今年4月に、その時期前後の数多くの出撃を記した「特攻隊銀河隊出撃之地」碑も建てられ、また久留米、萩などの縁者が建立した供養塔を見るのも悲しい。

大野原とよばれる火山灰の平坦地に航空隊が設けられたのは昭和16年であったが、その後太平洋戦争の進展にともなって、約300haにも拡張された。練習航空隊として昭和18年から出陣した航空予備学生の大半がここで操縦訓練を受けた。この間の態様は前記「雲の墓標」に詳しい。鶴が群舞する平和境に過ぎなかった近隣地区には、3000名もの兵員や作業員が溢れたが、軍・民ともに比較的のんびりしていた。それが、初空襲以降修羅場へと一変した。4月下旬までの連日の空襲で基地は壊滅的打撃を受けた。さらに終戦まで激化一方の敵機襲来による地元民の生命・家屋など有形・無形の被害は眼を覆うばかりであった。

私の父は当時町立青年学校長として、聖戦を信じ、軍の貞幹要員を送るべく、高等小学校卒業生の皇民教育に昼夜を分たぬ献身を続けていた。その父の日記には、その頃の1日が次のように記されている。

昭和20年4月22日 日曜日（注…日曜も出勤がその頃普通） 晴 温度13度

一、5時30分宿直室に起床（注…自宅危険のため学校に避難中）

一、敵機6～10時2回来襲 1人留守居の香橘（注…三男、小学校教員）蒼白と逃避来。

F・F氏即死の由。

一、宅其他午後1時より巡視、宅屋敷1個被弾あるも被害なし。

一、弔問F家、後刻妻便にて2円。

- 一、母等の壕見舞（注…老母は疎開を肯せず）。
- 一、通過後の時限爆弾気色悪し（注…投下された油脂爆弾・時限爆弾の誘爆音が昼夜連続、住民の恐怖は極限に達した）。
- 一、夜帰校 夕食9時 宿直室泊。
この僻村でも、基地から離れた地区への「疎開」を強いられたのである。

2. 私の軍学徒生活

出水の初空襲で戦争激化を身をもって痛感した私は直ちに上京した。途中、大阪・名古屋などの空襲焼跡を目撃したが、まさしく先日の阪神大震災の惨状そのものであった。

陸予士に入校、将校生徒としての厳しい訓練を受けた。しかし、小学校・旧中・幼年学校での「天皇絶対・命令服従」の鑄型にはまっていた私には、体制順応は大した苦痛ではなかった。ある日、歴史学教官が「日本神話を信じる者は眼をつぶったままで手をあげよ」と問うたとき、半信半疑の中で挙手したことを、今でも恥ずかしく思う。

育ち盛りの10代後半だから、腹は無性に減った。将校育成のエリート機関といえども、食生活は極端に貧しく、さつまいもの植付を競争でやったり、野外演習の帰路に採取した野草が夕食の雑炊に化けて出たりした。今読む大佛次郎の「敗戦日記」にみられる天ぷら・ビールなどの御馳走は想像もできなかった。醜（しこ）の御楯（みたて）として2、3年の中に死ぬのはやむを得ないが、その前にかつて味わった銀鑄（ぎんつぼ）をもう一度食べておきたいなあ、その頃は真剣に夢見たのである。

出水の実家に手紙を出しても何の返事もない。特攻基地だから多分やられてしまったのだろう。東京も空襲が激しくなり、一円の火災が朝霞から遠望された。それでも5月頃までは味方の迎撃で時折B29の巨体が赤い炎に包まれてゆっくり墜落した直後、一きわ大きい火の玉が拡がることもあった。やがて対空砲火も少なくなり、空襲警報が出ると友軍機は我先に北関東へ待避し始め、上空は敵機の跳梁に委された。時たま勇敢に立ち向かう戦闘機があったが、掩蓋（えんがい）のない待避壕の近くにバラバラになった友軍機の部品がブスブスと音をたててつきささる時は生きた心地はなかった。伝単と言う宣伝ビラがサッサッという音とともに降ってきたが、そっと拾ってみると、『出水基地も爆撃した。早く降伏せよ』とあり、『ああ、やっぱりか』と覚悟した。

戦況は益々利あらず、8月に入って、本土決戦の中核を温存するとの名目で、信州浅間山麓に疎開した。ここの自然は雄大で、千曲川の水の冷たさが印象的だった。落ちついた訓練を始めて間もなく、8月15日の終戦の玉音放送があった。ラジオの雑音がひどく、聖戦完遂の激励だなと想像した。やがて、敗戦の事実が判ったが、山の中では大した混乱も生ぜず、豊富に支給されだした食事をかきこみ過ぎて下痢を起したこともあった。

自然退校となって徒歩で峠越えし、確か上田駅から復員した。駅頭で「山の中に隠れてでも神州再興を図れ」と手を握った区隊長の大尉は、数カ月後には東大へ編入学して、その後代議

士選挙へも打って出た。私自身も若干13歳で職業軍人をめざしたのは、当時の少年倶楽部に連載された小説「星の生徒」の恰好よさにまず引かれ、また心底ではどうせ軍人になるなら将校が有利との判断もあったのだろうから、先輩の華麗な変身をとやかく言う資格はない。

北陸本線の復員列車は通路まで一杯で、その荷物の上に立ち、天井に両手を支える始末だった。私たちが嘲るように、4発の大型米軍機が超低空を飛んでいた。

満員の列車を数日間乗り継いで、出水の自宅に辿り着いたのは9月上旬であった。家は残っていた。父も母も兄弟も生きていた。しかし、停電続きで、夜は油芯の灯の下で粟や芋をかきこんでいた。

3. 戦後の一家と私

父は教育者として多くの教え子を戦死させた責任を感じて終戦直後に辞職した。その後推されて町長になり、混乱期の処理に当たったが、戦争中の無理が祟って衰弱死した。海兵出の次兄が終戦6日前に本土東方海上の敵艦めがけて特攻戦死したが、その公報を公職の立場で受けねばならなかった父の気持を思うとやるせない。母も、白木1枚の遺骨箱を見てどこかで生きているのではと30年間言い続けて死んだ。終戦後の長兄の満州抑留・農地開放・子沢山などで私の家はすっかり没落した。

私は、その後40数年の公務員生活を経て、縁あって久留米市に落ちついた。時折、昔訪ねた軍都久留米の戦車隊・騎兵隊・砲兵隊など、つわものどもの旧跡を往時夢幻と彷徨している。季節の移ろいの中で、庭先の草木・虫・鳥がお互いに調和しながら生き、そして死んで行くのを親しみを込めて眺めている。サリン疑惑のかかる邪教集団が、感覚遮断の環境下で行う一方的思想改造ぶりに、かつての軍国教育の中の私自身の姿を重ね合わせ、一切の理非を見失う戦争の悲惨さを繰り返さぬように祈っている。知覧特攻平和祈念館に掲げられた写真に見る、出撃即ち死の直前に子犬と戯れる少年特攻兵達の、あどけない笑顔が私の脳裡を離れない。



出水基地「陸攻隊銀河隊出撃之地」碑